



見通す心

【新潟県】木村 涼子 きむら りょうこ
58歳

その時まで自分は大丈夫だと思っていた。何でも「なるようになる」で乗り切ってきたし、気持ちの切り替えも早いし。しこりを見つけた時も主人には内緒で近くの外科を受診した。紹介状を持って大
学病院に行き告知を受けた時も1人だった。主人も仕事が忙しかったので「大丈夫だよ」と言っていた。1人で臨んだ。私の両親や主人の母にも知らせなかったから手術当日も1人。手術室へ向かう時も看護師と談笑しながらだった。病室に戻った時も1人。だから、私は大丈夫だと思っていた……だけだ。

その時に何かが変わった。「がんのステージ」「生存率」「転移の可能性」「再発」「抗がん剤」……。医師の言葉が頭の中で幾つもの渦を巻いていた。心の中で「大丈夫、私は大丈夫」とつぶやきながら病室に戻った私のところに看護師がやってきた。その晩、担当の彼女は「血圧測ろうか」と優しく手を取った。そして1回測り終わると私と目を合わせながらこう言った。

「大丈夫？」
大丈夫なんかじゃない。張り詰めた心が砕けた瞬間だった。あふれる涙と共に嗚咽おとろがもれる。抑えようと思ってもそれは止まらなかった。彼女は何も言わずに手をさすってくれた。

しばらくして私の肩をポンポンと叩くと、「眠れるかな。先生に薬だしてもらおうね。そう言うとな彼女は部屋を出て行った。そのあと私はしばらく泣いていた。でも不思議と気持ちが楽になっていることに気付いた。

看護師は何もかも見通したのだ。言葉にしろなくても、できなくとも。表情に出いなくても、出せなくとも。患者の心を理解し、寄り添う心。表面に出ないものを見通して、そして包み込んでくれる。私は彼女に救われたと心か
ら思った。